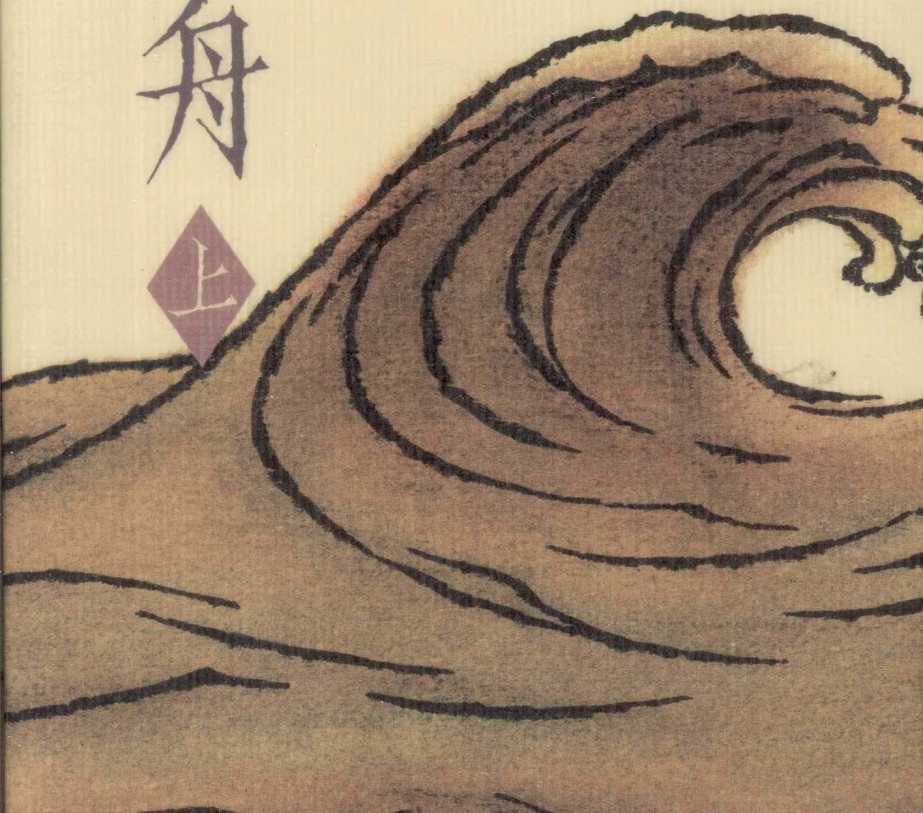


宮城谷昌光

天空の舟

上

小説・伊尹伝



天空の舟

小説・伊尹伝

宮城谷昌光

江苏工业学院图书馆
藏书章

上

海越出版社

みやぎたに まさみつ
宮城谷 昌光

昭和20年，愛知県蒲郡市生れ。
早稲田大学文学部卒業。出版社編集部を経て，
同47年から執筆活動に専念。

天空の舟―小説・伊尹伝―

(上巻)

一九九〇年七月二十七日 第一刷

一九九一年一月二十七日 第二刷

著者―宮城谷昌光

発行人―天野 作市

発行所―海越出版社

〒461 名古屋市中東区葵1の26の10

電話 〇五二・九三五・八四五八(代)

振替口座・名古屋5―64920

印刷所―函書印刷株式会社

定価はカバーに表示しています。

©MASAMITSU MIYAGITANI

1991. Printed in Japan

ISBN4-87697-100-5

落丁本・乱丁本は海越出版社にお送りください。

お取り替えます。

天空の舟——小説・伊尹伝——上巻◎もくじ

天空の舟

——小説・伊尹^{いゐん}伝——
上卷

大洪水……………	7
王宮での生活……………	34
商の叛乱……………	66
北からの凶風……………	95
莘邑の危機……………	113
いけにえの使者……………	144

楽園の夢……………	364
西方の花……………	343
土笛の少年……………	321
商からの脱出……………	296
東方会戦……………	259
仲虺暗殺計画……………	235
野人二人……………	213
舟の橋……………	171

天空の舟

——小説・伊尹伝——

上巻

大洪水

女は夢うつつにいます。……

どろりと重い気のようなものを体膚に感じた。なにかが、自分の体内にはいつてくる。その異様さに、女は慄然りっぜんとした。

かたわらに寝ているはずの夫にむかって、助けをもとめようとしても、のどが渴ききつて、声はない。

——川だ。

女は身に糸もかけず、みどりの水に没してゆく自分を発見した。臨月なのである。わたしが溺れてしまうと、この児が……、と自分にしかきこえない悲鳴とともに、腹に手をやると、あるべきはずの豊かなふくらみが消えていた。胎児がいない。女はまた悲鳴を発し、つぎに考えたことは、

——わが児は死んで、どこかへ流れていってしまった。ならば、わたしも死のう。

ということであった。女はくるおしさのなかで臉をとじた。すると水底が破れたような、たよりなさを覚え、自分の髪で全身が吊られたような鈍痛があった。頭上の水面が鱗々りんりんと目にうつっている。

——まだ生きている。

急にあたりが曹闇ぼうあんとなった。洞穴らしい。奇岩でできた口腔こうくうにほのかな光がある。女は誘われるように光源に近づいていった。水がぬるくなった。

視界がにわかひらけたとき、女は奇状ななにかの前に立っていた。光はその裏側しやくしやくから爍々と岩洞にはなたれている。女は光を求めて黒いかたまりにそって、むこう側にしようとした。

——動いた。

女は弾かれたように手をはなした。いままでさわっていたものが岩だとばかり思っていたのである。さらにそれは、動く、動く、動く、——。水流は渦巻きはじめた。女ははいつくばり、飛ばされないように、足もとにあった石の角にしがみついた。

やがて激流はやんで、あたりは真昼のようにあかるくなった。女の目が光源に真向かった。その光源こそは、巨大な魚の目にほかならないとわかったとき、女は気が遠くなった。

どれほど気絶していたことだろう、目をひらくと、華はなと見まごうばかりの見知らぬ女の顔があった。一見して、貴女であることは、瞭らうらかである。その貴女をつつんでいる透き徹りそうな綺羅きらが揺れるたびに、女からすれば妬ねたましいほどの豊艶な肌体が想われる。

貴女の腕のなかに乳呑児がいる。

「わたくしがだれか、わかりますか」

と、貴女は微笑した。そういわれた女は、啞然とする口を、とじようとしているだけである。

「あなたがいつも、お祀まつりりしてくれますね、この水の主あまじです」

——伊水の神女様。

女はふるえる膝をおさえつつ頓首した。伊水はいまの河南省の西部をながれて洛水にそそぐ川である。洛水は黄河にそそいでいる。

「さあ、顔をあげて、この児をごらん下さい。あなたのお児ですよ。なんという、うつくしいお児でしょう。あなたの日ごろの敬慎ぶりをくんで、あなたとあなたの嬰兒の命を、損なうことは免じましよう」

女はなんのことか、わからなかった。

神女は微笑を消した。

「これからわたくしのいうことに、ひとつとして、たがえることがあつてはなりません。……いつの日か、この水はあふれます」

そういわれたとき、女は、あつと、心のなかでのけぞつた。洪水がおこるのだ。

神女のことばは淳々とつづく。

「あなたの家の、臼や籠に、蛙がのつていれば、すみやかに東へむかつて走りなさい。十里走りつづけると桑園があります。そこではひととき大きい桑の樹がみつかるでしょう。その樹には空洞のところがありますから、そこへあなたの児をあずけなさい。ただし、その児を桑の樹にたくすまえに、けつしてうしろをふりかえつてはなりません。よろしいですか。洪水のことは、むらびとに告げてもかまいませんが、おそらく信じる者はだれもいないでしょう。——では、この児はおかえしいたしましようね」

神女から差し込まれた赤い髪を、抱きとったとき、女は夢からさめた。と同時に、猛烈な陣痛がきた。黎明、――女は珠玉のような赤い髪を産んだ。

この赤い髪がのちの、

「伊尹」

である。かれは商の湯王を輔け、夏王朝から商王朝への革命を成功にみちびく、稀代の人となる。さて、女はわが赤い髪をみて、全身の毛が逆立つほどにおどろいた。夢のなかで神女に抱かれていた赤い髪とそっくりではないか。

――ああ、洪水。

かかと頭に血がのぼった。口がうまくひらかなかつた。それでも女はなにかわめいたようであったが、それを産後の興奮だと判断した家族は、この血走った目をした若い婦を、ひとまずねむらせることに心をくだいた。

つぎの日、さっそく女は夢の委細を夫にうちあけた。

「伊水の神女様がそう仰せられたのか」

洪水とは死を意味する。妻のことばをむげに笑いとばすことはできない。夫は乳呑児の顔をみながら、いささかおどろき、いささか考えた。

――伊水をお祀りしているのは、わが家ばかりではない。

それなのにどうしてわが妻をえらんで神は予告してきたのか。そこが夫にはいぶかしい。またむらにはれつきとした巫祝（神へ仕える者）がいて、むらびとの総意として、犠牲を川に沈め、巫祝をと

おして伊水を祀っているのである。大水の予言を神から聴くとしたら、その巫祝でなければなるまい。そういう夫のことばに、反発するように、

「いつか天に日（太陽）が十もいちどに出たときは、まえもってなんのお告げもなかったではありませんか」

と、この母になりたての女は、暗に巫祝を批難して、唇をとがらせた。

たしかに数か月まえに、天中に太陽が十個ならんででるといふ異変があった。天空に太陽が十個もあらわれた、というのは古代の人の錯覚ではない。いまでも中国では鬻氣楼などで似たような現象がおこるらしい。

ただし夏王朝のころでは、それを、

「怪異な現象」

とただけでは、ことはすまされなかった。その天空の異変の責任を問われて朝廷の曆象官が死刑に処せられた、という風聞さえあった。

どういふことかという、中央政府の曆象官は一種の巫祝で、太陽の運行をつかさどり、地中に用意されている十個の太陽を、毎日ひとつずつ東から賓え西に餞るといふ大任があるにもかかわらず、太陽が一度に十個もあらわれてしまったということは、曆象官が職務を荒怠したということ以外なものでもなく、死刑に処せられることは充分にありえた、ということである。曆が狂うことを夏王朝の衰亡のきざしとみて、夏王朝から離心する諸族が頻出することもありうるからである。

夫はこわい顔になり、声をおさえて、

「めったなことをいってはならん。天のことは、わしらのかわることではない」と、妻を叱った。だがこの勝ち気な妻が、

「あんな不吉なことがあったので、王さまがおなくなりになったのではないかしら」といったとき、あわてて夫は妻の口もとに指をおしつけて、つぎのことばをふさいだ。

この年、帝厩の八年で、夏王である帝厩が崩御した。ついで立ったのが帝孔甲である。夏王はこの王で十四代目になる。このころ、

——夏王朝の存命も、おわりにちかづいたのではあるまいか。

という妄想が人々の心のなかにうまれ、蜘蛛が糸をはるように、妖言がさやさやと野の果てにまでひろがっている。夏王朝の腐臭を、ようやく人民がかぎつけたというべきであろう。

が、このむらの長老たちは、

——夏が滅びるわけではない。妖しげなうわさに耳をかしてはならぬ。

と、人心の蕩恐をいませめた。しかしさういうかれらにしても不安がなくはない。というのは、天空に太陽が十個でる以前に、夏王朝の衰微を如実にあらわす事件があったからである。

夏王朝のころは、正確には一年のことを一載とよんでいる。この時点よりも四載（年）まえに、夏王室から信任の篤い大族の昆吾氏が、百七十六載（年）にわたって勤めてきた王畿の守護を放棄して、国許へ引き揚げてしまったことである。さらに怪しむべきことに、この恣行にたいして、夏王はなんの譴責もしなかった。いやあれば、しなかったのではない、できなかつたのだ、と何人かの諸侯はみた。それほど夏王は凡器がつづき、そのあいだに諸侯のなかで朝廷の威勢をうわまわる力をつけた者

がでてきた。昆吾氏がそれである。

——やがて天命は昆吾氏にくだるのではあるまいか。

と、夏王朝の崩壊をみこして、ひそかに昆吾氏に誼を通じた諸侯もではじめた。

夏王である帝厪が崩じたのはそんな情勢のなかである。しかも王座を襲ったのは帝厪の子ではなく、帝厪の従兄にあたる孔甲であった。あるいは帝厪に子が無かったのかもしれないが、もしもそうでなかったのなら、王位継承をめぐる王室内に一波瀾あったと考えられる。

ところで伊水のあたりを支配しているのは、斟鄩氏^{しんじん}といって、夏王室からわかれた名族である。当然、夏王室へは同情がある。ところが昔時に、あわや夏王朝が滅亡するかもしれないほどの大乱があり、そのおりこの斟鄩氏は夏王を奉戴^{ほうたい}して、舟戦で覆敗した。敵は悪名高い寒浞^{かんすい}（韓浞とも書かれる）と澆^{ぎょう}の父子であった。斟鄩氏は大敗したあと、夏の忠臣である伯靡^{はくび}と鬻力^{りよく}することで、滅亡からまぬかれたが、それ以来、威勢はおとろえつづけ、いまでは並の諸侯とかわりない。それでも斟鄩氏は夏王への衷誠^{ちゅうせい}を失っていない。それが庶人にしみ、伊水のほとりの土地柄としてあらわれている。

夏は滅びるわけではない、だがこういう世態の不安定なときであるから、

——盗賊にそなえよ。

と、長老たちはむらをかこんでいる堵^{かき}の高さをますことを指示した。そのため、毎日男たちはモッコをかついで、土をはこばなければならぬ。

——盗賊もおそろしいが、水のほうがもっとおそろしい。

と、頭をふった妻は、こんどは泣かんばかりになった。

その必死の気色にうたれた夫は、まず父親に相談した。人命にかかわることとはいえ、夢による不確実な予言を、いきなり他人に話して、それがその道では第一人者たる巫祝の耳に達すると、どんなにくせをつけられるやもしれぬと思ったのは、父子ともにおなじであった。二人だけでは話の煮詰めようもないので、長者さまのお智慧をおかりしようではないかと、翌朝かれらは、ひごろ信服している長老の宅へでかけていった。

かれらの話をきいた、寛柔な長老は、

——夢をおろそかにするつもりは毛頭ないが……。

と、まえおきして、貴人のみた夢と、庶人のみた夢とでは、夢語をきくほうからすると、うけとりかたがちがってくる、といった。たしかに各家の寵というのは、その家にとっては祭壇にもあたらうという大切なところである。そこに蛙がのるといふことは、水をかぶるといふきざしにちがいない。だからその夢は理路がととのっている。

——だが、じゃ、これがおまえさんたちの家の嫁からではなく、となりの家の嫁からでた話であつたら、信じようかの。

父子は顔を見合わせた。つぎに嘆息した。

なにしろかれらの隣家の婦は、無器量、無愛想、無遠慮で、たまに笑うと豚のような声を発する女で、むらでも評判のきらわれ者である。あんな女の話を書けば耳がけがれるというものだ。

——ひとに信じてもらおうというのが、どだい無理な話じゃった。

とはいふものの、胸にたまっていたものを吐きだしたせいか、この父子はだいぶん気が霽れた。父